



当院図書室における課題

木下 久美子

I. はじめに

昨今の病院図書室をとりまく環境の変化が著しく、従来の機能・サービスの延長線上ではない、その時代に対応する図書室の機能・サービスが求められる。そのため、当図書室も多くの課題を抱えている。今回、そのうちの主要3点を取りあげ、今後の対応について検討した。

II. インターネットの活用

伝統的な病院図書室の機能・サービスは、以下に代表されるものであった。

- 蔵書提供：貸出・閲覧・複写など
- 医学文献集の提供：検索指導・代行検索
- 文献の取り寄せ（文献サービス）
- レファレンスサービス
- 閲覧などのためのスペース提供

しかし、インターネットの登場でこれらのサービス・業務が変化した。当図書室ではインターネットが利用できるパソコンを5台置き、インターネットでの文献検索の指導・代行検索サービスを提供することとなった。レファレンスサービスでは、蔵書を利用した情報提供に加え、インターネットなどのデジタル情報も併せて提供するようになった。文献の相互貸借における所蔵館調査では、NACSIS Webcat あるいは加盟する日赤図書室協議会の Web 版雑誌目録を利用することとなった。これまで利用してきた東海地区医学図書館協議会の雑誌目録も、最近、冊子体から Web 版に切り替わった。一

方、加盟する図書室ネットワークはホームページを持ち、図書室業務に必要な情報の入手を助け、担当者同士の交換の場を提供してくれることとなった。このように、インターネットは図書室のサービス・業務に欠かせないものとなっている。

しかし、インターネットの普及が、別の形で図書室に影響を及ぼしている。当院の医師は、図書室のインターネット回線を医局まで伸ばして医局で文献検索を行っている。また、イントラネット版の「今日の診療」を導入したことで「今日の治療指針」「今日の診断指針」を始めとする医学書院が発行する8冊の書籍を、図書室ではなく医局・外来・病棟の電子カルテ画面から見ることができるようになった。毎年行う看護師への文献検索指導では、医学中央雑誌 Web 版に加えて日本看護協会が会員に無料で提供する JDream の説明を加えたところ、自宅のインターネットで看護文献を調べる看護師が増えた。このようにインターネットや院内 LAN の普及により、図書室に行かなくても手元で必要な情報を入手することができるようになった。

インターネットは、サーチエンジンを利用すればたちどころに様々な情報を集めてくれる。かつては統計書や辞書類などのレファレンスブックを使って入手していた情報も無料で入手できる。その結果、調査などのために来館していた利用者が減る傾向となった。

こういった状況は病院に限ったものではないことから、医科系大学図書館や規模の大きな病院図書室における対応を大学図書館などのホー

ムページから見てみる。大学図書館などは、非来館者のための図書館からのサービスを構築し、Science Direct、MD Consult などの電子ジャーナルパッケージ、その他各種の情報検索データベース、電子テキストなどを揃え、有料デジタルコンテンツの入り口（ポータル）を提供して、利用者と情報を繋いでいる。また、PubMed のリンクアウト機能より全文を読めるように登録している。それらの操作方法やカバーされる情報が頻繁に更新されることから、その最新情報などの提供も重要な仕事となっている¹⁾。

ホームページを作る病院図書室はあるが、蔵書情報や役立つサイトの情報提供にとどまっています。膨大な情報量の電子ジャーナルやデータベースのポータルとしての役目を持つものは少ないように見うけられる。PubMed のリンクアウト機能を活用する病院図書室もあるが、購読雑誌そのものが少ない場合は、その機能が十分生かされていないように思われる。

一方、現在販売されているジャーナルパッケージは教育機関である大学図書館や大規模病院図書館向けとなっていて、収録雑誌タイトルが非常に多い割には臨床病院で必要とする雑誌は少ない。病院図書室の利用者のニーズに応じるには、複数のパッケージを購入しなくてはならないが、どのパッケージも高額で、予算が少ない病院図書室で購入することは難しい。

かつて図書室ネットワークを立ち上げた先輩たちは、病院図書室の蔵書の少なさを克服するために、医学雑誌総合目録を作り資料の共同利用化をすすめた。それにより、小さな図書室であっても、利用者が欲しい文献を迅速に提供できるようになった。

そこで、図書室ネットワークが、電子ジャーナルパッケージやデータベースを安価に購入するためのコンソーシウムをつくることはできないものかと思う。図書室担当者が派遣やパートであったり、他業務との兼任であったりする現状では容易でないこともわかるが、実現すれば、

病院図書室にとって大きな味方となるのは間違いない。ネットワーク事業の課題として、ぜひ取り上げていただきたいと思う。

現在無料で公開されている情報も、その情報の価値が高くなるにつれ、アクセスに課金される可能性がある。そういった場合は、当然図書館がそのアクセスの入り口となるだろう。

インターネットを積極的に活用して、各種の情報源と利用者を結ぶ図書室ポータルを作ることが、当図書室の課題となっている。

Ⅲ. 「知の創造」を支援するスペース

図書室の来館利用者の目的は、文献手配の依頼、単行本や雑誌の借用・閲覧、情報機器類の使用、情報検索支援の要求などに代表される。

当院で最近増えているのはパソコン、およびその周辺機器の利用者である。情報の検索・加工・発信あるいは学会発表の準備や投稿原稿作成に情報機器類の利用のために図書室を訪れる。そのため、図書室では、検索支援や情報機器類の活用支援などが仕事に加わった。

ところで、最近六本木ヒルズの森ビルにできた会員制ライブラリー“六本木ヒルズライブラリー”が話題を呼んでいる²⁾。蔵書数が膨大というわけではなく、蔵書を貸し出すわけでもなく、有料（年会費6万円以上）にもかかわらず開設後の8カ月で1,000人が入会したという。このライブラリーの魅力は、利用者のための情報機器が充実して、大人のための洗練されたインテリア空間を提供していることにあると思われる。「知」の創造を支援する最適なスペースがあれば、たとえ有料であっても利用する人が出てくる点が興味深い。

当院図書室は25年前に作られ、蔵書の増加に合わせて会議室を図書室に転用するなど、部屋が分散して、図書室の施設としての魅力は乏しい。医療財政が厳しい中にあるのは、改築の時でもなければ施設の改善は難しい。しかし、情報機器類の充実、その活用を支援する「人的」サービスの提供、インターネットでは入手でき

ない書籍の充実によって六本木ヒルズライブラリーとまではいかなくとも、「知の創造」を支援する場としての機能の向上をはかりたく思っている。

IV. 患者への図書室公開

当院ではラウンジ兼用の患者図書室（室内面積200m²）があり、蔵書は9,000冊を越え、年間2万冊の貸し出しがある。医学図書室と患者図書室（ラウンジ）が遠く離れていることもあり、貸し出しにはボランティアの協力を得ている。患者やその家族が病気について学ぶことができる本を提供できるようにと努めて、現在は医学・健康書が約500冊、闘病記や周辺図書が800冊、医学ビデオ200本、購読健康雑誌5種を提供している。

健康雑誌などを閲覧する人は増えているが、昨年度の医学健康図書の貸し出しは、450冊であった。カウンターで詳しい医学情報のリクエストがあれば、医学図書室の司書が出向いてサービスするようにしているが、月に1～2件とそれほど多くはない。医学情報に対する患者らのニーズは年々増加していると思われるが、蔵書が増えた割には、その利用が大幅に増えてはいない。患者図書室は、インフォームドコンセント（十分な説明に基づく、患者の理解と同意）を支える情報源としての役割を果たしてはいないように思われる。

ところで、最近、東京女子医科大学に患者のための図書館「からだ情報館」³⁾が作られた。患者らに医学情報の提供を目的に開設され、毎日150名の利用者があるという。担当者として司書が常駐し、所蔵資料を整備しさまざまなレ

ファレンスに応じて図書の紹介、インターネット検索をサポートすると同時に、看護師が医療相談に応じている。

これをみると、図書室がその機能を発揮するには、施設と豊富な蔵書に加えて、熟練図書館員の存在が欠かせないことがわかる。当院の患者図書室は、カウンターサービスなどをボランティアに頼っており、そこに限界があるかと思われる。患者が目的とする情報を入手できるよう支援するのは、日頃から医学情報に接する病院図書室担当者の仕事である。医学図書室の公開を含め、司書が直接患者にサービスを提供していきたく思っている。

V. おわりに

今回は、当図書室を見直すよい機会となった。課題を明らかにしながら、対応の具体的な行動計画が不十分であることを痛感させられた。インドの図書館学者ランガナタンが発表した図書館の基本5原則の中に、「図書館は成長する有機体である」ということばがあるが、これから当図書室の進化・成長を実現したく思う。

参考文献

- 1) 熊谷智恵子：院内 LAN を活用しての情報発信. 日赤図書館雑誌. 2004 ; 11 (1) : 7-12.
- 2) アカデミーヒルズ六本木ライブラリー. [引用 2005-01-11].
<http://www.academyhills.com/library/>
- 3) 桑原文子：からだ情報館. -専任司書のいる病院内の患者学習図書室-. みんなの図書館. 2004 ; 329 : 32-37.